

このページでは、「いっしょに！ OSAKINI プロジェクト」と題して、2021年4月に設立された大崎町SDGs推進協議会

(参画団体：大崎町、鹿児島相互信用金庫、株式会社そののまち、株式会社南日本放送、合作株式会社)の活動をご紹介します。

いっしょに

OSAKINI PROJECT

VOL. 05

みなさんこんにちは！季節は冬に向かっていきますね、私はちょっと寒くなるこの季節に散歩やドライブをするのが大好きです。紅葉も楽しみです。さて今回は、住民の方々が主体の組織「衛生自治会」の中村幸一会長と萩原洋一副会長のインタビューをお届けします。



中垣るる (なかがきる) ▶

事務局 広報/PR担当 / 所属: 合作株式会社



(中央) 中村幸一さん: 衛生自治会 会長  
(左) 萩原洋一さん: 衛生自治会 副会長



Q1

1998年、3品目の分別からスタートし、現在の27品目に辿り着きましたが、その過程のなかで、お二人はどういう思いをお持ちでしたか？

A

**中村:** 最初は大変でした。でもだんだんと、集落ごとにみんなで「間違わないように分別しよう」と分別に対する敷居が下がっていくのを感じました。

**萩原:** 私が分別に携わるようになったのは集落の班長になった時で、当時すでに相当数の分別品目になっていましたから急激に増えていく感じはありませんでした。でも、そのあたりから、ごみの問題や地球の環境について興味を持つようになり、少しずつですが分別の必要性や資源ごみの流れを学ぶ姿勢に変わっていったように記憶しています。

Q2

リサイクル率日本一という実績は、全国に誇れることだと思いますが、他の衛生自治会の方々や普段接する住民の方々は、分別やリサイクルに対してどんな意識をお持ちだと感じられますか？

A

**中村:** 月に1回ある資源ごみの日に、立ち合いをする集落が多いですが、今ではそれが当たり前の風景になりました。ここまで分別が根付いたのは、なによりも、住民の方々が分別を続けてきてくださったおかげだと思います。

**萩原:** 私自身、当初は分別を少しめんどろに感じていましたが、全国各地から研修に来られた方々の「大崎町は20年先を走っていますね」との言葉に、まわりの人たちはそういう目で見ているのかと意識が変わってきました。

さらに、役員になって、分別された資源ごみがどのようにリサイクルされているか、工場見学を通して学ぶ中で、少しずつ環境保全に対する理解が進み、リサイクル先進地で生きていくことの使命感を感じるようになってきました。

住民の方々の意識については、ほとんどの方が「もう慣れた」とおっしゃる一方で、やはり「めんどろだ」という方もいらっしゃると思います。ただ、子どもたちや若い方々の中には“SDGs”として捉える方が増えてきたように感じます。

